柔道を世界に広めた快男子　前田光世（まえだみつよ）

このたびのシドニーオリンピックの柔道で、日本の野村忠宏、滝本誠、井上康生、田村亮子は、見事金メダルに輝いた。

いまでこそ柔道は、アメリカ、イギリス、フランス、ロシア、オランダ、イタリアなどでも盛んにおこなわれる国際的なスポーツだが、明治の中ごろまでは、柔道の名まえすらしらない国が多かった。

そんなとき、日本の柔道をひろく世界にしようかいしながら、各地で一流ボクサーや、レスラーから他流試合を挑まれて対戦し、いちども敗れることのなかった快男子が弘前からでている。

前田光世である。

前田は一八七八年（明治十一）、中郡船沢村（いまの弘前市大字船沢）にうまれた。

上背こそなかったが（身長はわずか一六〇センチそこそこだった）、まるで鎧でもつけたような、みごとな筋肉質の体で、小学校六年のとき、すでに米二俵（百二十キロ）をかつぎあげるほどの怪力だったという。

前田は、小学校を卒業すると旧制の弘前中学に進んだが、とちゅうで東京の早稲田（わせだ）中学に転校した。本格的に柔道を習ったのはこのときで

ある。

練習場は、早稲田専門学校（現在の早稲田大学）

はがねのような、たくましい体の前田はまた、人なみすぐれた、すばらしい運動神経のもち主だった。それに、柔道家にふさわしい素質をもっていたので、前田の腕まえは、みるみる上達していった。

柔道をならいはじめて二年――前田は、学生柔道界のトップに立った。もはや、相手になるものはなくなって、前田は、さらに講道館に入門したのである。一八九七年（明治三十）のことだった。

もって生れた柔道の素質をここでも発揮し、入門後五年にして四段に昇進した。講道館においてこのような昇進は例のないことだった。

前田の技は、講道館でも群をぬいていた。試合をしても、敗れることはなかった。前田の柔道は名実ともに日本一の強さになっていたのである。

柔道の天才――なみはずれた強さをみこまれて前田は、各大学から柔道の指導をたのまれるようになった。たのまれると、ことわりきれない前田は、早稲田大学や学習院大学、東京高等師範学校などに出かけて柔道をおしえた。

が、それも長くはつづかなかった。

一九〇五年（明治三十八）――こんどは、アメリカから招かれて柔道をしょうかいすることになったからである。

渡米した前田が、はじめにおとずれたのは、ニューヨークの近くにある、ウエスト・ポイント陸軍士官学校だった。

前田と同行したのは、講道館の富田六段。

全校生徒のまえで、しょうかいしたのは型である。型をとおして、道理にかなった柔道の技を知ってもらいたかったからである。

すなわち投げの型、古式の型、柔剛の型の三つだが、それぞれ、百回ずつ実演してみせるという熱のこもったものだった。

投げは富田で、受けは前田――前田は、もっぱら投げられ役である。

型は剣道もおなじだが、打ちよりも受けが大事であるように、柔道の場合も、受け役があざやかでないと技はひきたたない。

それが、投げられる側にはたいへんなつらさである。十回や二十回ならまだしも、三百回も投げられる前田にとっては、えらいことだった。

だがそれを、見ごとにやってのけた。

投げられ役の、みごとな前田の身のこなしに、みんな目をむいた。

「これは――まるで軽業だよ。」

「人間業(わざ)じゃないっ。」

敏しょうな前田の動きが、みんなの目には、まるで飛鳥のように見えたにちがいない。

つぎに、前田たちがやってきたのは、プリンストン大学だった。

ここでは学生たちのほかに、一般の観客もいっぱいつめかけた。

はじめのときとおなじように、柔道の型を披露したが、そのあとで、ぜひ前田と試合をしたいという者があらわれた。見ると身長一八〇センチ、体重も百キロをこすと思われる大男だった。男はレスリングのチャンピオンだという。前田は、こころよく試合をひきうけた。

「うわぁっ。」

「これは、ゆかいなことになったぞ。」

喜んだのは、観客や学生たちだった。

レスラーにくらべると、前田は大人と子供ほどのちがいがある。それを見て、いかに柔道はつよくても、チャンピオンにかなうはずはない

――とみんなは感じた。

「いざ――。」

「うおっ――。」

二人は、気合を入れて身がまえた。が、相手を見て前田はおどろいた。

自分は、柔道着をつけているのに、チャンピオンは上半身が裸だったからである。

なんとも奇妙な対戦だった。裸のものを相手にするのは初めてのことだから、さすがの前田も面くらった。柔道着をつけた相手なら、そで口でもえり元でも手をかけられるのに、裸の相手だから、まったくつかみどころがないからである。しかも、正式な柔道の試合とちがって、敷いてあるのは畳ではなく、体操のマットだった。ふわふわした感じで、足にも力が入らない。こんなとき、どんな技をかければいいのか？

一瞬、とまどう前田を、いきなり相手がつかまえた。そのまま力まかせにぐいぐい押してきたではないか。

「そうだ――。」

「その調子だ――。」

「日本の小男をひとつぶしにしてしまえっ。」

観客も学生たちも、さかんにチャンピオンをけしかけた。それをきいて、前田にいかりがこみあげた。

＜日本の小男だと？なにを、こしゃくなっ。＞

そのまま相手におされたのでは、日本柔道のめいよにかかわる。

＜よーし。＞こうなったら、捨て身の技でいくしかないと決心した。

前田は、力づくで押しこんでくるチャンピオンの力を逆に利用したのである。いきなり、片足を相手の下腹にかけて、そのまま体を沈めた。体を沈めながら前田は、チャンピオンの腕をつかんでぐいっと前に引いた。

「とおっ。」

すさまじい前田の気合がおこったのと、相手の大男が、大きく半円をえがいてみごとにマットにたたきつけられたのと同時だった。

「あっ――。」

「これは？」

観客は、目を疑った。たたきつけられたのが、小兵の日本柔道家ではなく、レスリングのチャンピオンだったからである。夢にも考えなかったことがおこったのだ。

前田がしかけたのは、隅(すが)み返(がえ)しの技だった。これは、講道館の練習でも、めったに出ることのない高度な技だが、日ごろれんましていた前田には、このときの試合で、みごとにそれが出来たのである。

はじめは、＞小男を、ひとつぶしに＜とさけんだ観客も、柔道のすばらしさを見なおした。

「ワンダフル――。」

「おお、ワンダフル――。」

しきりに感嘆しながら、前田に、おしみない拍手を送った。

日本の小男が、飛鳥のような身軽さで、レスリングのチャンピオンをたおす――アメリカの新聞は、日本の柔道家の超人的な技をたたえた。

それに、刺戟されたのかもしれない。柔道熱は、アメリカ全土にひろまったのである。

前田のところに、柔道を学びたいという者がぞくぞくあらわれた。前田は、もちろん快く引きうけた。

相手を攻撃するのではなく、あくまでも身をまもる――それが、柔道のみちであること。礼にはじまって、礼におわる――前田は柔道をとおして、日本の礼儀を教えるのも目的だった。

しかし残念なことに、当時のアメリカ人は、前田の気持を理解できなかった。

小さな体で、巨漢をなげつける――それが、なんとも不思議でならなかったし、たまらなく興味をそそられることだった。

こうしてまた前田は、レスラーやボクサーたちから他流試合を申しこまれることになる。

このときも、相手になったのは、ニューヨーク体育クラブに所属するレスラーだった。それは、前回よりもさらに大きな、見あげるばかりな巨大漢だった。

ありがたいことには、男はガウンを身にまとい、ベルトをしめている。＜どこにでも、自由に手をかけられる……＞

さて、マットにあがった前田は、すばやく、相手の袖口とえりもとをつかまえた。

が、引いても押してもびくともしない。

これには、前田も閉口した。すこしでも、体をうごかしてくれれば技をしかけられるのだが……、仁王立ちになったまま動かないのは、じつは相手の計略だったのだ。それを知って、前田もかくごをきめた。

＜よーし。それなら、根気くらべだ＞

相手の体をつかまえたまま、前田も、ぴたりとうごきをとめたのである。

そのまま一分すぎ、二分すぎた。それでも、たがいに動くけはいはない。

じりじりしたのは観客だった。

「なにをしてるんだっ？」

「二人とも、ロボットか……」

声をかけられて、あわてたのは巨大漢のレスラーだった。前田の襟くびをつかんで、ぐいと押してきた。

前田は、＜しめたっ＞と思った。とっさに体をうしろにひらいて、得意な釣りこみ腰の大わざをかけたのである。

技は、みごとにきまった。レスラーは、どうとばかりにマットにたたきつけられた。

それで勝負はきまったはずなのに……おかしなことが起こった。

マットに沈んだレスラーは、立ちあがると、ふたたび前田に組みついてきたからである。

試合のまえに、あらかじめ勝負のルールをきめてあるのに――それを無視した相手のたいどに、前田もめんくらった。

前田は、けんめいにルールを説明し、勝負がついたことを主張した。

が、相手は、耳もかさなかった。投げつけられて、怒りにもえた巨大漢は、すさまじい形相でたちむかってくるではないか。

それを見て、観客までがはやしたてた。

「やっつけてしまえっ。」

「日本柔道を、たたきのめせ。」

こうなっては、もはやあとにはひけない。

ついに、前田もあきらめた。

怒り狂ったレスラーを、こんどは体落しできめ、そのままうしろから送りえりじめをかけた。そのまま二十秒――相手は必死にこらえていたが、ついにカブトをぬいだ。

「ま、まいった。」

巨大漢は、すごすごと引きさがっていった。このときも新聞は、大きく前田の活躍を報じた。

柔道家、前田光世の名は、もはやアメリカで知らないものはなかった。

だが、依然として興味本位に挑戦するものはあとをたたず、深夜に、ピストルをもったやくざものにおそわれたり、荒くれ船員たちから、けんかを吹っかけられたこともあった。

しかし前田は、柔道の技で、ぶじ危機をのがれたのである。

前田が、アメリカで他流試合をしながら柔道の普及にあたったのは三年間――一九〇五年（明治三十八）から一九〇七年（明治四十）までだった。

前田は、アメリカで富田（とみた）六段とわかれて単身イギリスに渡った。

一九〇七年（明治四十）二月二日――ニューヨーク港から出港したが、この日は、すさまじい吹雪だった。

イギリスでも、すでに日本の柔道家、前田の名は知れわたっていた。

が、ここでも柔道の普及とはべつに、前田は、他流試合を挑まれた。

愉快だったのは、ロンドンにやってきたときである。松田と名のる男が、まちで天下無敵の看板をかかげて柔道塾を開いているという。さっそく、前田が出かけてみると、日本の紋服をつけた大男があらわれた。だが、それは日本人ではなく英国人ではないか。男は、ふんぞりかえって、たずねていった前田なんか相手にもしないたいどである。前田は、ちょっと、からかってやれと思った。

「柔道の、手ほどきを受けたいのですが……。」

と、頭をさげてたのんで見た。

「いかにも、望むとあれば教えてもかまわんが……。かくごは、出来てるのかね？」

「かくご？」

おもわず、前田はききかえした。

「柔道をならうからには、足腰の骨がおれ、立てなくなってもいいというかくごだよ。」

それを聞いて、おかしくなったが、そしらぬ顔でこたえた。

「そのかくごなら、できております。」

こうして、松田と名のる英国人と対戦した前田は、あざやかな内股できめた。ところが、相手は参ったとはいわない。

「お前のうでまえは、ほめてつかわすが、それは柔道の技ではない。」

という。これには、前田もあぜんとした。

勝手に日本人名をかたって、天下無敵の看板をかかげた柔道塾の先生が、内股を柔道の技ではないというのだから、あきれるほかなかった。

こうして、ロンドンを去った前田は、英国各地をまわって柔道のしょうかいと他流試合をつづけながら、こんどはベルギーに渡り、さらに

スペインまでやってきた。

スペインでも、柔道家前田の名まえは広まっていたが、ここに来て、コンデ・コマという特別なよび名を贈られた。

コンデというのは、伯爵という意味である。コンデ・コマというよび名について、前田はつぎのように語っている。

「僕が、スペインのバスロナ市にやってきたとき、われこそ日本一の柔道チャンピオンだと名のる男がいて、それがいま、バスロナへ来るという噂だ。ところが、彼は僕のことを知っているから、ぼくがバスロナにいるとわかれば逃げるかもしれない。それで、ぼくは本名をかくさなくてはならないが、さて、なんと名まえをかえようか？

いろいろ考えたが、かっこうな名まえは思いつかない。困る、こまると考えて、いっそのこと＞前田コマルとしてはどうか？＜と思った。が、語呂がわるい。それで、コマルのルを取ったらコマと、ことばの響きもわるくないので、これにきめたんだ。それを、スペインの知人から、前田コマでは単調すぎるから、コンデをつけてコンデ・コマにしろといわれた」という。

コンデ・コマと名前をかえた前田はスペインからメキシコ、ハバナをまわり、南米ブラジルまで足をむけた。そのあいだに前田は、いのちしらずの黒人や、力じまんのドイツ人と試合をしたり、闘牛士ともたたかった。

日本をでてから、他流試合をしたのは千回以上に及んでいる。そして、いちども敗れなかった。それは、前田が人なみはずれた強さをもっ

ていたからである。それとともに、日本の柔道そのものが、絶妙な体術として、はったつしたからにほかならない。

ともかく、単身で世界をまわり、いのちにかかわる他流試合をしながら、存分に柔道の腕をふるったのは痛快なことである。

前田が、ブラジルに渡ったのは一九一五年（大正四）だった。彼はそこを永住の地ときめた。

前田は、世界一つよい日本柔道家としてブラジル国民に尊敬されたが、彼自身、ブラジル人になりきったきもちだった。

前田は、柔道を紹介しながら他流試合もしたが、わすれてはならないのは、移民事業にも大きな貢献をしたことである。

すなわち、当時のブラジルは、日本人が移住するのに適した土地であった。晩年の前田は、もっぱら日本のブラジル移民のしごとに力をそそいだのである。

しかし、柔道できたえた体も病気には勝てなかった。前田が亡くなったのは一九三一年（昭和六）十一月二十八日――六十二歳だった。

参考文献　薄田斬雲『日本柔道魂前田光世の世界制覇』一九四三年（昭和十八）鶴書房

出典：弘前人物志編集委員会編『中学生のための弘前人物志平成十五年度版』二〇〇三年（平成十五年）弘前市教育委員会、二一六－二二八頁